

---

# おこじょ

のみのみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おこじよ

### 【コード】

N0683H

### 【作者名】

のみのみの

### 【あらすじ】

高校の相談部。もうすぐ夏休みだというのに厄介な相談が持ち込まれた。解決させようと奮闘するが、いつの間にか大事になっていて……。

## プロローグ

井藤雅子いとう まさこと御中佳奈実みなか かなみの二人はいつも生徒の中では一番始めに登校している事で有名だった。

勿論、事務の人はそれよりも前に来ているので、中に入れないという事はない。

そして今日、6月23日の火曜日にも、二人は早い時間に登校していた。

部活動に所属しているのだから荷物は部室に置いておきたい所だが、あえてそれをしない二人は教室に向かっている。

二人の所属する2年2組の教室は、教室の集まるHR棟の二階にある。

井藤は扉に手をかけて、それを横に引こうとした。

「どうしたの？」

手をかけたまま一向に動こうとしない井藤を見て、御中は聞く。

「開かない」

そう言っつて井藤は扉から離れ、御中に触ってみるよう促した。

御中が開けようとすると、確かに開かなかつた。鍵がかかっているようだ。

「3組は開いてた」

未だ扉と格闘している御中に向かって、井藤は言った。

と、突然扉の向こう側から、何かが倒れる音がした。細長く、あの程度の硬さのあるものようだ。

御中が急いで扉を開けてみると、それはあっさりと開き、中の冷気が廊下に流れ出てきた。

「さぶっ」

季節は梅雨と言えども夏だ。冷房で部屋が冷やされているのは有り難かったが、これは過剰だ。

井藤は一先ず鞆を置き、今年から実装されたエアコンの設定温度を確認する。

13

そう表示されていた。設定可能な温度では最低値である。井藤はエアコンの電源を落とす。

昨日、誰かが悪戯をして、そのまま帰ったのだろう。バレたらエアコンがしばらく使えなくなるというのに、馬鹿な事をする。

一方の御中は未だ開けられていない後ろ側の扉を見詰めていた。そこには、扉が開かないようにするためなのか取っ手の部分に器用に立掛けられた木の棒があった。

「なんだろうね、これ」

入ってきた方の扉の前に倒れた木の棒と見比べながら、御中は首を傾げた。

## 1 持ち込まれた相談

高校には相談部という部活動が存在する。活動はその名の通り相談を受け、それを解決するというもの。新聞を毎月発行する新聞部よりは知名度では劣るものの、それでも多くの生徒にとつて学校生活では重宝する部活だ。

新聞部でも同様の活動をしてはいるが、天才肌が多い部活の為か、敷居の高さを感じさせる。

一方の相談部は、生徒からもある程度の経験と人気と信頼を持つ生徒が相談という事に特化して活動しているので、大分敷居は低いのだ。

兼部している生徒が多い相談部だが、現在兼部をしていないのは井藤雅子と御中佳奈実の二人だけだ。

基本的に兼部生が部に役職を持つ事は禁止されているので、必然的にその二人が部長と副部長になっていた。

七月に入り、夏休み間近のこの時期、相談部は意外と忙しいのだが、今年はそれに拍車がかかっていた。

先月の23日、丁度井藤と御中の二人の教室がギンギンに冷やされていたあの日、教室の掃除用具入れから猫の死体が発見された。

保健所に持っていったが、どうやら噛み殺されていたらしい。

井藤と御中は一応エアコンがついていた事、そして教室の扉に開かないように仕掛けがしてあった事を話したが、特にそれがどうという訳でもなく、そのまま只の偶然が重なったものとして処理された。

そしてこの日を境に相談部は忙しくなっていた。

なぜだか相談の内容には奇妙な傾向が見られた。

それは動物。鼠の死骸の臭いを消すには。ペットのウサギを探し

てほしい。小鳥が何羽も怪我をしていたからどうしたらいいか。チワワがいつもの散歩コースを歩きたがらなくなった。夜勉強していると犬の鳴き声が煩いのでどうすればいいか。などなど。

同様の相談が相次いだがそれも今日までだ、と井藤と御中の二人は考えていた。

明日からは夏休みに入り、部活はそれが明けるまで休みとなる。そんな休みが待ちどろしい日に、ある相談が持ち込まれた。

コンコン

二人が部室でくつろいでいると扉がノックされた。

「どうぞ」

そう部長の井藤が言うと、一人の女子生徒が入ってきた。

「失礼します」

シヨートの黒髪で背が高く、しっかりとした体格から彼女が体育会系である事が窺える。

「水野<sup>みずの</sup>緋<sup>ひ</sup>とさん、ですか。ここに座ってね」

淡い緑色のテーブルクロスのかかった机の近くに椅子を置きながら、御中が彼女、水野に席を勧める。

井藤は水野が座るとほぼ同時に彼女にティーカップを差し出す。

水野はそれに会釈をすると、一口飲んだ。

対面に井藤と御中が座り、井藤が話を切り出した。

「水野さん、彼氏の勝君とは上手くいつてる？」

「えっ、あつ、はあ、まあ」

突然の事に顔を赤く染めた彼女を微笑ましく見ながら、井藤は話を続ける。

「それで、水野さんは私達に何の相談なの？ まさか飼ってるペットが、とか？」

「あ、はい。そうです。何でそれ？」

井藤達は驚き、顔を見合わせた。それに構わず水野は話し出す。

「えっつですね、相談というのは、私の飼っているミーちゃんを殺

した犯人を捕まえてほしいんです」

早々と聞く体制になっていた井藤が聞く。

「ミーちゃんって、何者なの？」

「ミーちゃんは私が飼っているペットです」

「ああ、そうじゃなくてさ。ウサギ？」

「そうです。先輩、よく分かりましたね」

ひっそりと溜め息をつく井藤。この性格、素でも故意でも面倒だ、と思った。

「それで、私達は別に構わないんだけど。水野さん、警察とか役所とかに行っただ？」

「警察、には行ってないですね」

「それじゃ、役所には行ったのね」

「いいえ。何で行かないといけないんです？」

井藤は頭を抱えなくなってきた。

代わりに御中が聞く。

「ところでさ、どうして殺されたと思うの？」

「あ、その事ですね」

そう言つと水野は鞆から一枚の写真を取り出した。

「これを見てください」

なぜか白黒写真だったが、その情景は充分に認識できた。

どうやら家の中に置いたケージを撮影したものようだ。その中に黒いウサギと思われる物体が写っている。

「このウサギが、ミーちゃん」

「はい」

井藤はそう確認すると、御中と共に写真を観察する。

ケージの周りは絨毯が敷かれ、奥には扉の閉められた棚がある。

写真に写っているのはそれだけだった。

ウサギはよく見ると白と黒の斑点になっている。詳しくは分からないが黒いのは血液だろう。ウサギの周囲にもそれは広がっているが、ケージの外には出ていない。

「成程」

井藤はそれだけ言うと、椅子に座り直した。御中は写真を手に取りじっと見る。

水野は説明する。

「その写真を撮ったのが一昨日です。私達が買い物に行っている間にこうなっていて」

「ということは、もしかして、通称、密室とかいう状況なの？」

御中が視線を水野に向けながら聞くと、返ってきたのは肯定の返事だった。

「はい、玄関は勿論ですけど、窓も全部閉まっていました。あ、あと、エアコンがついていました。消してから出掛けたはずなんですけど」

その答えを聞いてまた顔を見合わせる二人だった。

## 2 虹色の宝石

現場百見という事で、井藤と御中の二人は水野の家に向かった。相談部の方は他の部員に任せた。

高校の程近く、二ヶ月程前に殺人事件が起こったマンション。その二階に水野は住んでいる。

「ただいまー」

「お邪魔しますー」

「おかえり。あら、いらつしゃい」

出迎えたのは見た目20代の女性だ。水野が二人を紹介する。

「お母さん、この人達はこの前話した相談部の井藤部長と御中副部長」

「こんにちは」

「よろしくお願ひします」

「そうなの。さ、遠慮なく入って入って」

三人はその水野の母 母よりも姉と言われた方がしっくりくるが に招き入れられるまま奥に進む。

左右に一部屋ずつ、奥にキッチンとリビング、その隣にお風呂のある2LKのようだ。

八畳程のリビングにある唯一の机。その周りを取り囲むように置かれた四つある椅子の内の二つに井藤と御中は座った。

水野は御中の対面に座り、冷えたジュースを全員分持ってきた水野の母は残りの一つに座った。

井藤は軽く会釈をしてからジュースに口を付け、そして話し出した。

「私達は水野緋与さんに頼まれて、ウサギの亡くなった理由について調べようと思っています」

水野の母はちらりと視線を水野に向けたが、すぐに井藤に向き直り先を促した。

「さつそくですが、そのウサギがいた場所、というのは」  
「あそこです」

水野が指を指したのはリビングの中でもキッチンから一番離れた空間だった。

その壁には写真で見たような棚があったが、ケージは見当たらない。売り払ったのだろうか。

「その棚の前にミーちゃんがいました」

水野は淡々と言った。

あれ？ と御中は思った。何か変だ、と。

「水野さん、写真を見せて」

もやもやした気持のままそう御中は言い、写真を受け取る。

そして、写った棚を見てそのもやもやの原因がはつきりした。

「水野さん、棚の傷、気付いてた？」

御中に突然尋ねられ反応が遅れたが、少し考えてから答える。

「いいえ」

「そう」

井藤に写真を渡した御中は椅子に深く座り直し、考える人の像のように前屈みになって動きを止めた。

写真を受け取った井藤は、棚を見比べると合点がいったようで、

「一つ頷くと写真を水野に返した。」

「どうしたんですか」

写真を受け取りながら尋ねる水野に、井藤は説明をする。

「その棚と写真に写っている棚を見比べてみて。写真には無く  
て、そこには有るもの。何だ」

じつと水野とその母は二つを見比べていたが、やがて水野がポツ  
リと言った。

「傷？」

「そう、傷。木目と判別付きにくいけど、その棚にははつきり付  
いているのに写真には明らかに無いよね。ウサギが殺された後に付  
けられたんだと思う。お母さんの方は気付いておられましたか？」

水野の母は首を横に振る。

「そうですね」

井藤はジューズにまた口をつけたきり御中同様黙りこんでしまった。

しばらくして御中はゆっくりとした動作で立ち上がると、棚の前に座り込んだ。

棚の下を覗き込んだり、扉を開けて中を見たりしていたが、突然手を棚の下に差し込んだ。

「みつけた」

そう言つと手を引き戻す。その手には虹色に光る小さな宝石のような物が握られていた。

直径は2cmも無い球形だったであろうその宝石は途中で割れていて、半分しかなかった。

「それは？」

水野の母が尋ねると、御中は井藤を見る。井藤の首が横に振られたのを確認すると、こう言った。

「私達では分かりません。ですけど、これが知らない内に持ち込まれた、という事実の方が大切ですよ」

御中は鞆から小さなビニール袋を取り出すと、その中に宝石をしまつて鞆に戻した。

それを見て井藤は立ち上がる。

「それでは今日は失礼しました。きっと犯人を見付け出しましょう」  
そう言つて井藤と御中は玄関に向かおうとする。

その時。井藤の携帯電話が鳴り響いた。

鞆から携帯を取り出した井藤は発信者を確認すると、水野とその母に一言断りを入れてから電話に出た。

「佐々木先輩、どうしたんですか？」

「テレビつけて」

それだけを言つと、電話は切られた。

電話の相手は佐々木萌子、相談部の三年生だった。彼女は第六感が強いらしく、一部からは未来予知ができるのではと噂されていた。井藤は水野に言う。

「水野さん、テレビつけてくれますか」

「えっ、あっはい」

突然の頼みにもかかわらず水野はすぐに行動に移した。

テレビの電源がつけられ、報道番組が映される。

「スです。今朝7時20分頃、S県×市内の一軒家で男性の遺体が発見されました。遺体は個人の判別が難しく身元はまだ分かってはいませんが、S県警では一軒家の所有者で現在行方不明の本庄俊さんとみて身元の確認を急いでいます。死因は出血多量によるショック死で、昨晚遅くの23時頃に死亡したとみられています。

県警では何者かに殺害されたとみて全力で捜査をしています。続いて、気象情報です。花辺さん」

「はいはい。今日はとても日射しが強くからつとした夏晴れでしたが、明日は南部を中心に一日中すっきりとしない天気になりそうです。それでは」

### 3 事件の詳細と符合

部室棟の一階、その奥まった所に相談部の資料室がある。

年に数回しか使われないこの部屋は埃が溜っていて、御中が歩く都度に舞い上がっていた。息苦しさを感じるが、書棚の隙間から差し込むオレンジ色の陽光が中空に映し出される様子は、まるでダイヤモンドダストのように幻想的でもある。

壁に寄せられた書棚には半分程だけがノートやファイルで埋められていた。その中の一冊のノートを御中は手に取る。

相当古い物のようで、表紙の字はかすれ、剥がれ落ちそうになっていた。それでも読めない程ではない。

『期学1年9781 録記動活』

そう書かれていた。130年も前に書かれたようだった。

御中はそこまで考えて苦笑し、首を振る。確かに 高校は130年以上の歴史があるが、当時はまだ明治だ。西暦を使うはずがない。

誰かが写し取ったか、あるいは捏造された過去か。

幾度辿ったか分からない思考を今日も最後までやりとげ、御中はようやくノートを開けた。

これにこんなにこだわるのは、私だけなんだろうか。

テレビに写し出された事件。

翌日、つまり夏休み初日に新聞を見て、井藤はその詳細を知った。7月17日早朝7時32分、本庄俊の自宅近くを通りかかった近所の主婦から異臭がすると警察に連絡があった。駆け付けた警察官が玄関中に入ろうとするが、鍵がかかっているため断念。庭に回りこむとガラス戸の向こうに人らしき姿が倒れている事を確認した警察官は、そのガラス戸が開かない事が分かると手頃な石を使って穴

を作り開錠して中に入った。警官はハンカチで鼻を押さえると、その人らしき物体を見た。単なる人型の肉塊だと思えたかもしれないが、股間や首もとに残った布切れは生前その人が服を着ていた事を明らかに示していた。

死体は男性とも女性とも分からない程酷い状態だった。頭から足先まで野獣が食べたかのように肉や内臓があらわになっており、とてもではないが直視はできなかつたという。

その一週間の後、鑑識等の尽力により以下の幾つかの事項が確認された、との記事を見付けた。

まずは被害者が本庄俊本人である事。血液、皮膚、髪の毛のそれぞれから採取したDNAと、生前使っていたベッドから採取された髪の毛のDNAが一致し、歯形も以前通院した医院に保管されていたものと一致したため、断定された。

次にそこが密室であつた事。第一発見者の警官が開けた所以外の出入り可能な所は、全て鍵が締まっていた。これにより、他殺の線が濃厚になった。

次に冷房がついていた事。因みに設定温度は12 だった。これにより死亡推定時刻をずらしたとの見方もできるが、そもそも死亡推定時刻自体の推定が難しいため理由は定かではない。聞き込み等により死亡推定時刻は16日の深夜23時から24時の一時間に絞られた。

最後に、カッターによつて心臓を一突きされそれが致命傷となつたこと。そして呼吸停止後に肉体の破壊行為が行われた事。これにより、他殺である事がほぼ確定した。

ちなみに、主婦が異臭を確認したのは換気扇が回っていたからで、もしも回っていなかった場合は発見が大幅に遅れた可能性があつた。

切り抜きのスクラップを眺めながら井藤は溜め息をつく。

事件を詳しく調べるために様々な新聞や週刊誌を買ってしまい、夏休み初日からお金を沢山使ってしまったのだ。

しかも、ウサギ殺害との接点は決定的なものが見付からなかったため解決に近づく事もなく、佐々木萌子の言った言葉の意味が分からなくなる一方だった。

ただ、6月23日の事、ウサギ殺害の事、今回の殺人事件、そして7月に入って多くなつた相談。これら全てを考えた時は見逃せない接点があることに気付いた。

井藤は部長として、相談部の相談内容とその時のアドバイスを記録したノートの内容全てを把握しているつもりだったが、改めて読み返してそう感じたのだ。

それは動物、密室、冷房の三つだった。

「入るよ」

御中が帰ってきた。資料室に気になるものがあるからと言っていたので、7月28日の今日、二人で登校したのだ。

御中が持ってきた物は一冊の古びたノートだった。

『期学1年9781 録記動活』

表紙にそう書かれていたそのノートの真ん中程のページを、御中は井藤に開いて見せる。そこには縦書きでこう書いてあった。

『度々生き物の相談を請け、水無月某日、今井一郎より無くし物の相談を請ける事有り。そはコロールフルなる小石にて、我河辺にて見付け、又これ譲り受けん。この度の事、真に不思議なり。動物が人を殺し、人が殺せず。その場、部屋から出ること、また入ること難し。ただ我の手元のコロールフルなる小石にて、この度の事、終わりし。東条影睦ひょうむつかげちか記す』

御中の言う通り確かに気になる部分があるな、と井藤は思った。勿論、文体も気にはなつたがそうではない。

まずは生き物の相談が増えていた事。次にカラフルな石の事。そして動物による人殺し。更に密室を暗示する記述。

怖気がした。

これ以上は危険だ、と二人は本能的に思った。ここまでの符合はオカシイ。更に“東条”が絡んでいる。

二人の視線は、机の上に透明の袋に入れられた虹色の石と最後の署名に注がれていた。

## 4 警察の発表

翌日。

『 今月16日に起こった×市猟奇殺人事件の現場に宝石のような虹色の石が 』

一週間もたったのに一向に報道の治まる気配を見せない通称、×市猟奇殺人事件。他にこれと言ったニュースが無いだけに、テレビでは連日そんな暗い事件ばかり流していた。

そして朝食中の御中の手が止まり、テレビに視線が移った。

『 犯人が落としていったとみられるこの 』  
画面が切り替わり、その石の映像になる。

『 半分が無くなっており、残りの発見が逮捕に繋がるとみて鑑定を進める一方で、民間からの情報の提供を 』

箸が手からこぼれ床に落ちたが、御中はそれに頓着する事なく勢いよく立ち上がって自室に置いてある携帯の元へと走って向かった。

携帯は御中が触れる直前に鳴動した。

御中は井藤からの電話だと確認すると、すぐに通話を始めた。

「見た？」

簡潔だが、今の二人にはこれで十分だった。

「うん」

御中はそう答え、そして聞く。

「どうする？」

井藤はしばらく沈黙してから簡潔に言った。

「部室に9時」

「分かった」

「それじゃ」

「うん」

早速御中は着替えて朝食を掻き込むと、急いで学校に向かった。

いつもなら吹奏楽部の音や野球部の声がる休日の学校は、しんと静まりかえっていた。

日が出ているにもかかわらず物音一つしない学校というものを不気味に感じながら、御中は校舎内に入り部室に向かう。

ウサギ殺しと猟奇殺人事件は無関係じゃない、か。

御中は思った。なぜ、動物を殺したのか。そこにはそれなりの理由がある。勿論、そんなもの始めから無いのかもしれないが。けど、理由が無い、というのも一つの理由ではあるから理由が無いことは、無い。

数学だと成り立たないな、と思いながら御中は部室に到着した。

「おはよう」

「おはよう」

中には既に井藤がいて、ティーカップに紅茶を注いでいる所だった。

御中は適当に置いてある椅子の一つをテーブルの近くまで引つ張っていき、それに座った。

井藤が注ぎ終えたカップの一つを御中の前に置く。

「ありがとう」

御中がお礼を言うと井藤は苦笑しながら対面に座った。

二人に挟まれたテーブルの上には、新品だが妙に分厚くなったノートと表紙が読めなくなる程に掠れた古いノート、ティーカップが二つ、そして虹色の宝石が置いてある。

井藤はその中から新品の方のノートを広げた。

「これが私の集めた猟奇殺人事件の記事。新聞、雑誌は勿論、インターネットからも探せるだけ探したらそんなになっちゃって。でもどこにも虹色の小石について書いて無かったから、本当に今朝発表されたみたい」

御中はパラパラとそのページを捲りながら言う。

「どうして、警察はこんなに情報を公開するんだろう？」  
「ん？ どういう事？」

「だってこんなに情報を公開したら、犯人の特定が難しくなるよね」  
「珍しい事もあるものだ」

「え？」

御中はハツとして井藤を見る。

「いやさ、いつもならそんな理論パズルなんて簡単に解く、っていうか勿体ぶらないでさっさと結論を言うでしょ。何か別の事で悩み？」

じつと井藤は御中が話し出すまで待つていた。

「大した事じゃないんだけど。5月位に心ちゃんから石田さんの事を聞いてね」

御中は一口紅茶を飲む。

「二人つて同じ吹奏楽部でしょ。だから分かったんだと思うんだけど、なんか石田さんの様子が変わったんだって」

「性格なんて、幾らでも偽造できるんじゃない？」

「うん、確かにそうなんだけど、本質は変わらないよ。それで私も直接会って、変わったって確信した」

井藤はじつと御中が話を続けるのを待つ。その間に何度か風が部屋に吹き込みノートを捲った。

「石田さんって、あの、新聞部を嫌っている節があるでしょ。それで、東条も関わっているから、その……」

「気を遣わなくていいよ。私が『オトシモノ』が嫌い、っていうか信じていない事に気を遣ってくれたのは嬉しいけど」

「……うん」

御中は小さく頷くが、井藤は大きく溜め息を吐いた。

「確か『オトシモノ』ってオーバーテクノロジーの結晶のことよね。もしかしてこの虹色の小石が『オトシモノ』だと思ったの？」

「うん……」

「いつもの筋道のある推論はどうしたのよ。もしそうだったとして、

新聞部が黙ってると思う？」

御中は小さく首を横に振った。それを見て井藤は小さく微笑み、紅茶を半分程飲んで続ける。

「そう。それで結局、警察が情報公開をするのは何でだと思っの？」

「それは、警察は犯人が判っているからだと思う」

犯人が判っている、と御中は小さくもう一度言い、いつもの調子を取り戻して続ける。

「犯人は殺害した後の猟奇的な方に興味があるから、証拠を消すことには気を回していない。だからすぐに判るはずと思った」

井藤は大きく頷くと残りの紅茶を飲みきり、立ち上がりながら御中に言う。

「よし。それじゃあ調べに行くか」

「えっ？」

驚いた顔をした御中を訝しげに見る井藤。

「私たちの最終目標はウサギを殺した犯人を見付ける事。でもこのまま警察に行っても教えてくれそうにないし、それに虹色の小石の事は警察も本当に分かっていないんですよ。まあ、犯人にそう思わせるためかもしれないけどね」

それを聞いて御中も頷き、紅茶を飲みきって立ち上がった。

「まあ、そもそも猟奇殺人事件の犯人とウサギを殺した犯人が同一人物とも限らないんだけど」

井藤が苦笑しながら付け加えたその言葉に、御中は微笑んだ。

## 5 東条との接触（前書き）

ファンタジーではありません。

## 5 東条との接触

井藤、御中の二人の背後には見事な日本庭園が広がっていた。手入れが大変そうだなと思いつながらここまで歩いてきた御中は、一息を吐く。

門扉の無い構えだけの門から玄関までは二人の足だと大分かかり、そして今は二階建ての豪邸が佇んでいるすぐ目の前に来ている。井藤は扉の周囲を確認するが呼び鈴のようなものは確認できなかった。しばらくその場で何もしていないしていると、突然扉が開き中から二人の男女が出てきた。

「いらつしゃいませ」

黒と白のフワフワな洋服、俗に言うメイド服を着て深々とお辞儀をしながらそう言った彼女は日荒川翠、正真正銘のメイドであり、井藤達と同じ 高校に通う1年生だ。

「先輩方、お久し振りです。さ、中にどうぞ」

そう言つて二人を中に招き入れるのはこの屋敷の主人にして同じく 高校1年の東条都靄だ。詳しい事はここでは割愛するが、彼の祖父が総理大臣だったとだけ言つておこう。

中に入りながら井藤は話を始めた。

「東条君、残念だったわね」

皮肉が込められているようにも聞こえるその言葉に、東条は朗らかに答える。

「まあ仕方ありませんよ。生徒会長は斉藤尊先輩が相応しいと思いますし、役員にはなれましたから。それに俺はまだ一年生ですから来年もチャンスがありますし」

「謙虚ね。そんなだから」

「こちらへどうぞ」

井藤の言葉は日荒川の言葉に遮られ、二人は部屋に招き入れられた。

「それで、どんなご用件ですか？」

御中が部屋に置いてある宇宙儀を興味深げに眺めていると、東条はそう聞いてきた。

いつの間にか並べられた緑茶の入ったカップの一つを井藤は手に取り、それをくるくる回しながらこう答えた。

「先週の16日に起きた猟奇殺人事件、知ってるわよね」

東条が頷くのを確認して、井藤は緑茶を一口飲む。

「それで警察が今朝、現場に虹色の小石が残されていた事を発表したの。東条君、知ってる？」

「虹色の小石、ですか」

東条はそう呟くと、部屋の入口近くに立っている日荒川に目配せをした。日荒川はその視線に頷くと、小さいけれど良く通る声で言った。

「その小石は東条影睦様、つまり都霧様の曾曾お祖父様に当たる方ですが、その影睦様が幼少の頃に発見されたと同じです。現物は本家の倉庫に保管されておりますので、猟奇殺人事件の物はそのレプリカかと思われます」

ふむ、と考え込んだ井藤に代わって、今度は東条が質問をする。

「お二人はどうしてそんな事を？」

「相談事の解決よ。依頼者は言えないけど、その生徒のペットが酷い状態で“殺されて”いてね」

そう言いながら井藤は鞆の中から一冊の古びたノートと虹色の小石の欠片の入った袋を取り出した。

東条はノートを手に取り付箋の貼ってあるページを黙読すると、今度は小石の方を手に取りそれを眺めた。

「それがレプリカという事は、『オトシモノ』ではないのね」

そう尋ねた井藤に対して東条は首を傾げる。

「さあ、俺は知りませんし分かりません。専門家に頼むのが一番だとは思いますが」

そこで一旦言葉を区切り、東条は井藤と御中を一度ずつ見た。

「新聞部が嫌でしたら、魔女さんか石田さんに頼んでみては」

嫌っていう訳じゃ無いんだけど、と苦笑してから井藤は聞く。

「魔女さん？」

「あ、知りませんか？ 去年に噂された」

「結城神無ゆづき かんなさんの事？」

「はい、結城先輩です。彼女なら何か分かるかもしれません」

東条は緑茶を一口飲む。

「こちらでも影睦について調べてみましょう。何か分かったらお知らせします」

「ありがとうね。助かるわ」

「いえいえ。お役に立てて光栄です」

そんなだから、と来た時と同じ事を思いながら井藤は御中と共に東条の豪邸を後にした。

もう遅いから、と結城を訪ねるのは翌日にすることにした。

東条邸からの帰り道、御中は結城について考えていた。

結城神無。去年の冬頃に噂された生徒七不思議の一人で、彼女は魔法が使えると言われていた。本人が否定した事と誰も見たことが無かった事によって早い段階で下火になっていたが、事実だったのか。まさに魔女っ子だな。

と、そこまで考えた時、突然井藤の足が止まった。続けて御中も足を止める。

明るい、だがどこか薄暗い、そんな時間帯。二人は一瞬、自分達と対峙している影が何なのか分からなかった。

だがその影が二人の近くにやってくる、愛らしい瞳が目に映った。体長25cm程で、体毛は褐色、尻尾が全長の3割以上を占めるその動物は、おこじよだろうか。

御中が気味悪そうに後退るのに対し、井藤はしゃがんでじっくり

と観察を始めた。人に寄ってくるのと綺麗に手入れをされている毛波から、ペットなのでは、と井藤が思った時だった。

「離れて」

それは誰がどちらに向けて発せられた言葉なのだろう。

そう井藤が思った直後、右腕に鋭い痛みを感じた。

「いつ  
」

叫ぼうとして唾然とした。おこじよがさっきまでとはまるで違う鋭い瞳で井藤を見つめながら噛みついていたので。

何人かが駆け寄ってくる足音が耳に入ると、おこじよは素早くその場から姿を消す。残された井藤は腕からの血で服が真っ赤に染まるのをぼんやりと見ながら、御中による応急処置を受けて病院に運ばれた。

## 6 残された疑問

目を開くと、目の前にある二つの顔がみるみるうちに哀から喜へ  
移り変わる様を、横になつてゐる井藤は興味深げに眺めていた。

一人は口をパクパクさせていたが、もう一人はしつかりと声を発  
した。

「……良かった」

「佳奈実と、日荒川さん？」

井藤が上体を起こそうとすると、御中が慌てたようにそれを制し  
た。

「雅子はまだ病み上がりなんだから、横になつてて」  
「ありがとう」

素直に再び横になつた井藤を見た御中は、泣き出しそうな声で言  
つた。

「雅子、腕から血を一杯出して、私すつごく心配したんだから」

「うん」

「私も襲われるんじゃないかって怖かつたんだから」

「うん」

「もしかしたら、つて思うと寝れなかつたんだからね」

あれから半日くらいが経つたのか、と井藤は左手で御中の頭を撫  
でながら思った。そしてもう一度、うんと相槌を打つ。

「私、ずっとそばにいたかつたんだよ」

井藤は、御中が自分に恋愛感情よからぬを持つてゐるのではと勘繰つたが、  
何かしらの大きなショックを受けるといつも思考回路が変わるので  
そこは気にしない事にした。

「所で、お二人に警察の方が」

その落ち着いた日荒川の言葉を聞いた御中はうるんだ瞳を何度か  
瞬きする事によって普段通りに戻すと、何度か頭を振って表情を引  
き締めた。

日荒川が病室の扉を開けると、その向こう側にいた二人のスーツ姿の男が会釈をして中に入ってきた。

宮と名乗った中年の県警の男は、もう一人の若い橋田という部下を脇に立たせたまま井藤に対して慣れた様子で質問をしてみた。

何をしていたのか、何から襲われたのか、何か心当たりがあるか、不審な人物を見掛けたか、等々。

井藤は虹色の小石の事も、またそれを手に入れた経緯も説明した。宮は事前に御中や日荒川にも同様の事情を聞いていたため、大して時間をかける事も無く聴取を終えた。

「そうでしたか。ご協力に感謝します。では私共はこれで」

橋田がメモ帳のようなものを閉じ、宮が辞そうとするのを御中は止めた。

「すみませんが、警察では×市猟奇殺人事件の犯人が分かっているのですね」

御中が言ったのは質問ではなく確認だった。

宮は少し驚いたのか足を止めて御中を細い目で見たが、それは本当に少しだった。

「申し訳ありませんが、お教えできません」

そこで僅かに言葉を選んで続ける。

「ただ、警察で回収した虹色の小石の欠片は『オトシモノ』ではありませんでしたよ。では」

そう言って今度こそ県警の二人は病室を出ていった。

8月に入り、夏の暑さもこれ以上無いというくらいになってきた。貧血と切傷のみだった井藤の怪我は一週間程で回復し、今二人は部室で冷たい緑茶を飲みながら今回の幾つかの事件について話し合っていた。

先日律儀にも井藤の自宅に宮からの電話があり、×市猟奇殺人事

件の犯人が逮捕され、そのペットのおこじよが井藤を襲ったとDNA鑑定で確認された、と伝えてきた。本来ならば井藤が襲われた7月29日以前には犯人を逮捕できたはずが、諸事情によって数日遅れてしまったために井藤に入院させてしまった、との個人的な謝罪付きだった。

ただ、そのおこじよが井藤を襲った原因が虹色の小石だと聞いて、井藤は早く警察に渡しておくべきだったと後悔をした。

「それにしても、結局の所、ウサギを殺したのは“何”なんだろうね」

×市猟奇殺人事件の粗方を確認し終えると、再び二人分の冷えた緑茶を入れてきた井藤が、それらを置きながら言った。

「県警の宮さんはその事に何か言ってたの？」

御中の問いに井藤は座りながら首を横に振る。

「殺人事件の犯人は、わざわざ人の家とか学校とかに入り込んで動物を殺すだけ、っていうハイリスク・ローリターンをやる訳がないそうよ」

冷たい飲み物を飲んだせいで汗が出てきた井藤はハンカチで汗を拭き、手元の団扇で扇ぎながら続ける。

「犯人は殺された本庄俊の親友で、冷房がついていたのはたまたまだし、密室になっていたのは犯人が合鍵を持っていたからだし、死体をぼろぼろにしたのは犯人のペットのおこじよだし」

蝉の鳴き声が五月蠅い。

「つまり、衝動的な犯行だっていう事ね」

続けた御中に井藤は頷く。

二人の間に静寂が訪れたが、すぐにまた蝉によって過ぎ去っていた。

でも、と井藤は言う。

「何で虹色の小石が、水野さんの家にあっただのか。それが問題だ」

芝居がかったその口調に微笑んだ御中は、さらりと核心を突いた。

「水野さんかその母親が本庄俊と何かしらの関係を持っていた」

井藤は頷き、確認の質問をする。

「水野さんの家で小石が半分に分かれて、片方が棚の下に入り込んだから本庄俊は仕方なく半分だけ持ち帰ったわけね」

「そう。なんだけど」

それだと白黒写真の説明がつかない。

そう続けようとした御中だったが、なんとなく口には出せなかった。

## 7 魔女と真実と

6月23日の事、ウサギ殺害の事、x市猟奇殺人事件、相談が多くなった事、そして東条の手記。

この中で明らかに解決したのは殺人事件だけ。手記は東条に任せであるので、相談部に残る問題は三つだ。それらは糸口は見えてきたものの、完全に解決したとは言えない状態だった。

そんな事に頭を悩ませている二人は、とりあえず結城神無の家に来ていた。とりあえず、とはいってもしっかりと虹色の小石の鑑定依頼という用件はある。また、水野緋与に会おうと連絡を取ったが、O県に家族旅行だと言っていたせいもある。

一軒家の入口は二人にとっては身の程に合っていたようで、東条の豪邸を思い出してそれぞれそつと息をついていた。

チャイムを鳴らすと、中からバタバタと階段を駆け降りる音がし、それは次第に玄関に近付いてくる。

そして一度も止まる事無く一気に扉が開けられ、黒髪を長く伸ばした井藤たちと同年代の少女が飛び出してきた。

「いらつしゃーい」

その少女はそう言うと、より玄関に近い所にいた井藤に抱きついた。

対する井藤は日常茶飯事なのか慌てる事無く抱きとめた。少女の足が地に付いていないので、全体重を井藤が支える事となる。

「お邪魔しますね、結城さん」

少女、結城はひゅっと顔を上げて、そう言った井藤の顔を眺める。何度か風に長い髪を揺らされて、結城はやっと言葉を出した。

「井藤さん？」

「はい」

まるで小さい子どもを扱うように少しかがんで結城をそつと下ろしながら、井藤はそう答えた。

結城は地面に両足を付いたものの、居心地が悪そうに目や手足をせわしく動かす。時々、あーとかうーとか言っているのが少し離れた所にいる御中にも聞こえてくる。

ようやく決心がついたのか、結城はさっきから笑顔を絶やさないと井藤を見て言った。

「ごめんなさい」

「はい、よくできました。魔女さん」

満面の笑顔の井藤に頭を撫でられ、結城は目を細めて喜んだ。が、最後に付け足された言葉に、体が強張る。

結城は恐る恐る井藤を見るも、そこにはいつもの笑顔があった。

困惑気味に御中を見ると頷かれたので、とりあえず話を聞く事に決める。

「中へ、どーぞ」

そう言っただけで結城は井藤と御中の二人を招き入れた。

井藤が一通りの事を話し終わると、結城は小さな体からは想像もつかない程の大きな溜め息を吐いた。

「つまり、この石がこの世界で言う所の『オトシモノ』かどうか。それが知りたいのね」

気になる発言はあるものの、相談部の二人は頷いた。

「分かった。ちょっと待っててね。5秒で戻ってくるから」

そう言っただけで足の付かない椅子から飛び降りるようにして立ち上がった結城は、トテトテと部屋を出ていった。

丁度部屋を出てから5秒後、結城は戻ってきた。

「違っただけ」

誰かに聞いてきたのだろっ。そう言っただけで結城は虹色の小石を二人に返した。

「そう」

なかばそうである事を確信していた二人は、さして驚く事も無くその結果を受け止めた。

「でも、何でこれが『オトシモノ』かもしれないっていう事にこだわるの?」

しばらくの沈黙を破って結城の口から出てきたのは鋭い声だった。「本当はもう、分かってるの?」

ちよつと酷いかな、と結城は思った。だが、二人は私の所に来ただから、これくらい言われて当然かも、とも思った。

「この石が本当は誰の物か、とか、写真が本当はどこで撮られたか、とか」

「やっぱりか」

空気に堪えかねて声を出したのは御中だった。

「何か変だとは思ってたんだ。x市猟奇殺人事件とウサギ殺しまでだったら何もおかしくは無い。けど、6月23日も入れると登場人物が少ない気がしたの。水野親子、本庄俊、殺人犯。学校で事件を起こす必然性を感じない。それとウサギの殺された様子を写した白黒写真も、同じ」

まだ確信していないのか、あるいはしたくないのか、御中は説明を続ける。

「白黒写真を私たちに見せれば、殺人事件との繋がりを疑われる。普通ならそうしないけど、今回は普通じゃなかった。自由意志ではなかった」

一旦口を切り、頭の中で整理をする。

「石が割れていたのも、それが水野さんの家と本庄さんの家にあつたのも、両方の鍵が締められていたのも、偶然ではなく、もう一人の存在があつたから。その人は」

「ちよつと待つて」

突然止めたのは、井藤だ。彼女は頼杖を突いて横目で御中を見た。「何で“彼”が水野さんを埋める<sup>は</sup>ような真似をするの? 写真を撮つて持つてこ“させた”のよね」

御中は小さく頷いたが何も言わなかった。

「誰だって、心は移りいくものだよ」

結城が言った。

それでも井藤は首を振る。

「でも」

「これは、言おうかどうか迷ったんだけどね」

井藤が否定しようとするのを結城は落ち着いて遮り、言う。

「あの石って、東条の家の倉庫にしまつてあつたみたいだけど、誰が複製したか分かる？ ううん。どんな気持ちで、かな。それが、何のために」

言い直した結城を見ても、これがどうすれば“彼”の心が変わった理由になるのか分からない二人は首を横に振る。

「あれは、嫉妬の塊だった。多分、東条一族を皆殺しにしたかった人がいたんだと思う。その人が作った虹色の小石」

「だった、っていう事は」

御中が聞くと、返ってきたのは首肯だった。

「そう。たまたま持つていた“彼”に、割れた衝撃でぶちまけられたの。その嫉妬っていう怨念がね。これは間違いなく、この世界の『オトシモノ』だったよ」

## 8 一つの結論

夏休みの明けた9月1日の放課後、相談部室には四人の姿があった。井藤、御中、水野、そして水野と付き合っている勝吉<sup>かついっき</sup>希だ。

正確には四人と一匹だが、その一匹は水野の膝の上で気持ちよさそうに寝ている。

「このおこじよ、僕のペットなんです」

勝は前に座る相談部の二人に話す。

「6月の始めの頃でした。こいつがああ虹色の宝石を持ってきたんです。まあ、人に慣れたフレットとは違って、おこじよはこの姿に似合わず結構野性的なんですよ。こいつはよく外に出歩いては、何かしらを持ち帰ってきました。」

なんとなくそれが綺麗だったから、緋与の家を持っていきましてね。いつもの事なんですけど、そのミーちゃんとこいつ、仲が悪いみたいで、いつつも喧嘩しているんですけど、その日は酷かった。こいつが異常に興奮して、殺気だっています。僕が止めようとすると腕を噛みましてね。たまたま手に持ってた宝石が床に落ちて、二つに割れてしまいました。

すると、そこから煙のようなものが出てきましたね。あ、いえ、僕もオカルトは信じていませんよ。あれは、何て言うか、錯覚だったと思います。でもその日から、どうもこいつの様子がおかしくて、ですね。

最初の事件が、確か6月23日でしたっけ。お二人のクラスに動物の死骸があったのは。あれをやったの、多分全部こいつです。そりゃ僕も半信半疑ですよ、こんなおこじよに何ができるのかって、でもそうとしか考えられないですよ。前夜に家から出ていって、早朝帰ってくる。それも血まみれで。その姿を見て、ぞつとしました。

それからちよくちよくこいつがいなくなるもんだから、一度だけ

後を追い掛けた事がありました。その時こいつは、いつの間にか捕まえてきた鼠を一軒の家の庭に山にして置いていくんです。もう見ていられなくて、こいつより先に家に戻りましたよ。

そんな日々が続いて、7月16日になりました。あの×市猟奇殺人事件です。あれ、犯人は警察が逮捕したみたいですが、遺体をぼろぼろにしたのが、こいつだと僕は考えています。宝石の欠片もこいつが持っていてたんでしょ。

その数日前ですね、ミーちゃんをこいつが食べたのは。疑ってみたいですけど、この写真は真正銘緋与の家で撮りましたよ。僕、写真部で、たまたまその時にカメラを持っていましたね。それで写した訳です。

それで、猟奇殺人事件が起きてからは、こいつは家に戻ってこなくなりました。

猟奇殺人事件自体は17日の朝に知りました。少々怖くなりました。緋与と相談した結果、貴女方に相談する事にしました。多少動転していた部分もあったので説明不足だったかもしれませんが、そういう事でした。宝石の映像が流された時は本当に驚きました。

8月に入ってしばらくしてからですかね。東条君から連絡がありました。こいつが警察に引き取られているから、と。それで行ってみると、こいつは殺気だつてなくて、以前の少し好奇心が旺盛なおこじよに戻っていました」

勝は話し終えて、適度に冷めた紅茶に口をつけた。

「棚の、傷は？」

井藤が聞くと、勝は答える。

「最近のカメラは精度が良いですけど、僕の使ったカメラは結構古い物なので、ピントがずれて傷が分からなくなっただんでしょ。動揺していたみたいですし、かり合わなかつたみたいですよ」

相談部の二人は揃って溜め息を吐いた。

「つまり、水野さんと本庄俊との関係は無い、という事ね」

井藤が言くと水野はコクリと頷いた。

9月になっても緩むことの無い暑さを持った空気が、相談部室を駆け抜ける。

「そういえば、こいつはどうやって密室に入ったり出たりしたんでしょう」

その質問に首を傾げる井藤と水野をどこかほっとした気持で眺めながら、御中はその答えを言った。

「まず一つ目の教室なんだけど、あれは簡単よ」

おこじよにできるかどうかは知らないけど、という事は御中は口には出さないで思うだけに留めた。

「細長い棒の先端に細い紐、例えば釣糸を付けて、その紐を扉の裏を通して廊下に出すの。棒は扉の閉まるほうとは反対側の柱に立掛けておいて。廊下に出たら扉を閉めて、紐を引けば単純な鍵がかかるわ」

一息を入れて、続ける。

「猟奇殺人事件のほうは詳しくは分からないけど、一番可能性の高いのは犯人がいる間にやった、っていう事かな。逮捕された時、そのおこじよ、犯人と一緒にいたみたいだし」

悩み事が解決したからかほっと息を吐く勝。

水野は、立ち上がる。

「ご迷惑をお掛けしました」

そう言ってお辞儀をすると、勝と共に部室を出ていった。

「結局、何だったんだろうね」

しばらくして井藤が呟いた。

御中はそれに首を傾げる。

「いやさ、随分違うなって思ってたね」

それを聞いて納得した御中は言う。

「真実は一つじゃあないよ。その人が納得できればそれが真実。それでもいいんじゃないかな」

「納得できなければ？」

「その納得できない、っていう事を納得してるでしょ。だからその納得できていない事が真実だって、暫定的にでも一応認めてるのよ」「納得できない。」

そう口にしかけて、井藤はハッと口を閉じた。

## エピソードA（賭と説教）

いつの間にか除け者にされるようになった宇宙儀を感慨深げに眺める東条都靄と日荒川翠。

「相談部のお二人は、無事解決されたのでしょうか」

日荒川が視線を窓から臨む庭に移しながら言った。

「無事、とはいかなかったみたいだけど、一応の解決には辿り着いたみたいだよ」

その東条の言葉にほっと息を吐く日荒川。  
だがすぐにキツと東条を睨みつける。

「ご主人様。お言葉ですが、私がもしお二人をお送りしていさえすれば、井藤雅子さんがお怪我をなさる事もなかったのですよ」

目に僅かにたじろいだ気配を見せた東条に、日荒川は更に詰め寄る。

「もしも彼女がお亡くなりになった場合、どうなさるおつもりでしたのでしょうかね」

「ど、どうもしないさ。いや、この場合は出来ないが正しいかもしれないが」

当然そう返される事が分かっていた日荒川は畳み掛ける。

「別に私はお二人に対してどうなさるおつもりか聞いた訳ではあり

ません。ただ、以後ご主人様にとってのマイナス要素しか提供しないこの賭に負けた場合に、どのように対処するのかをお聞きしたいだけです」

「何度も言うが、俺は何もしないさ。総理大臣になる訳じゃないんだ。例え君の言う賭に負けたとしても、何も損はしないよ」

「つまり、お二人は死んでも良かったと。そう仰るのですね」

「何もそこまで」

「言っております」

東条はグツと言葉に詰まる。

「私は別に人の命を大切にしない、等とわざわざ言っている訳ではないのですよ。人の命を大切にするという事の意義をご主人様に理解していただきたいと思っております」

「……」

「つまり、情けは人の為ならず、と申しますように」

日荒川の説教はまだまだ続きそうだ、と東条は溜め息を吐いた。

## エピソードB（裏側での出来事）

5月23日（土）

吹奏楽部を引退した直後の今日、この虹色の石を見付けたのは運命<sup>イト</sup>だったのかもしれないと考えている。

『オトシモノ』について色々調べてはいるが、あの時に感じた不可知なモノへの昂奮は、未だに忘れられない。確<sup>たしか</sup>に異能、いや超能が存在すると実感した。正確には思ったただけだが。

6月3日（水）

色々調べたが、この超能の正体が未だに解らない。ものは試し、と最近よく見掛けるおこじよに持たせてみた。

6月23日（火）

昨日の深夜、あのおこじよが猫を2年2組で食べていた。

『オトシモノ』の影響かどうかは検討の余地がある。

私はあの井藤雅子と御中佳奈実の二人が来る前に、非合理的な事をしておいた。ただの気まぐれだ。

7月17日（金）

おこじよを捕獲し、明日から詳しく検査をする。

気性が以前より更に荒くなっており捕獲に多少の苦勞をした。

7月20日(月)

おこじよに特に変わった所は見当たらず、いつの間にか気性が少しだが落ち着いたものになっていた。

検査はしやすいが、データはいまいちになるだろう。

7月28日(火)

おこじよが逃げた。

しばらく追い掛けたが、途中で監視されている気配を感じて諦めた。

あれは東条の所の日荒川だろうか。

検査結果はやはりそれ程良いものでは無く、『オトシモノ』の存在を確認するには到らなかつた。これからまたあのおこじよを捕まえても良い結果は得られないだろう。

## エピソードC（宮の見解）

俺が担当した通称「x市猟奇殺人事件」は一応解決はしたが、犯人（羽沢三乃雄<sup>はねさわ みのお</sup>という名前だ）の供述等二つの事柄には疑問点が残らなくもなかった。

まず第一に、事件発生からしばらくの間の羽沢の行方が分からなくなっている事だ。

本人にも（供述が正しければだが）どこにいたのかの記憶が存在していない。事件のあった時刻羽沢の側におこじよがいた、という事までは覚えているようだが、それからおこじよと共にどこにいたのが全く分かっていない。ちなみに逮捕されたのは羽沢自身が自宅のアパートに戻ってきたからで、その時の羽沢は茫然自失としていたと聞いている。

因みに、おこじよの本当の飼い主は勝という少年で、おこじよはフレットと違って狂暴だから今後はしっかりと飼育するように、としつかり言いきかせておいた。

もう一つの疑問だが、それはあの虹色に輝く石の事だ。あの石が発見された次の日には、上から圧力がかかってきた。俺は特に気には留めなかったが、一週間程で今度は残りの半分を探すように言われた時は正直驚いた。そしてこの石に疑問を持った人に会った時の対応として、よく分からない台詞を覚えさせられた。

記者に公開した次の日、御中と名乗る 高校の生徒から電話があり向かった病院で、俺はおこじよに腕を噛まれた井藤という同じく 高校の生徒に会った。この時に御中は石について疑問を持ったようで多少は驚いたが、これは大した事ではない。後から考えると、おこじよがその井藤を噛んだ時に羽沢が近くにいた、と考える事ができる。なぜ石を取り返そうとしたのか動機は不明だが、そう考えて間違いは無いだろう。

そもそもその石は本庄の持ち物だと聞いた。水野親子に話を聞い

た時も、本庄から何度か見せてもらったと聞いている。井藤が持っていた石は何らかの事故によって二つに割れ、それが水野と本庄の家にそれぞれあった。羽沢は割れている事を知らずに本庄を襲い、その後残りを探し出そうとして井藤を襲った。

井藤が襲われた事に関しては証拠が不十分だが、本庄殺しのほうは十分な指紋等の証拠と本人の自供があったので送検をした。何と無く動かさせられた感じのする事件だった。

## エピソードC（宮の見解）（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。  
わざわざ本作の反省などを書くことはしませんが、少々お知らせ（  
のようなもの）をしたいと思います。

気付いておられる方がいましたら大変嬉しい事なのですが、本作は  
実はシリーズ物の五作目となっております。

以下挙げますのがこれまでのシリーズになります。『あさはかさ』  
『「しき」み』 『スクールトゥルップ』 『テーゼ』です。よければ  
お読みください。（シリーズと言っても題名だけです）

とにもかくにも、読者の皆様に感謝する気持ちをお忘れの事無く、こ  
れからもより良い作品を書けるよう、細々とした努力を続けていき  
たいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0683h/>

---

おこじよ

2010年10月8日15時33分発行